

新 疆 の 手 塚 治 虫

ウイグル族の宗教世界再読

西 原 明 史

Osamu TEDUKA of Xinjiang: A Rereading of the Religious World in Uighur

Akifumi NISHIHARA

は じ め に

ウイグル族の宗教世界に迷い込んで、もう15年になる。シャーマニズムに始まり、イスラム教、さらにはイスラム神秘主義とそのフィールドは留まるところを知らない。かねてからシルクロードの舞台に生きる牧歌的な人々、最近では中国政府に抑圧され、独立を求める少数民族、といったイメージを持つウイグル族だが、実はその内部に複雑な宗教世界を秘めた人々でもある。

ウイグル族が仏教を熱心に信仰していたことは、彼らの住む新疆ウイグル自治区に散らばる遺跡が物語るが、やがて15世紀頃までには完全にイスラム教に取って代わられることになる。この改宗運動に大きく貢献したのがイスラム神秘主義と呼ばれる人々だが、彼らは新疆ではイシャン派（あるいはソピ・イシャン）と呼ばれる。イシャン（ixan）とは導師という意味だ。ズィキラ（zikira）というくるくる回り続ける舞踊を中心にした独特の儀式を行い、日常においても過剰な信仰活動を行うとされた彼らは、現在ではその勢力を失ってはいるが、そのひたむきさゆえか、人々の間に一定の共感を維持していることは否めない。

そしてそんな歴史宗教の影に隠れ、テレビの紀行番組などで取り上げられることなどまずない民間宗教として挙げられるのが、いわゆるシャーマニズムである。彼らの言葉でバクシ（bahxi）とかベルホン（pirihon）と呼ばれるシャーマンが、病気治療に活躍する場がまだ残っているのである。「イスラムの衣を脱げばシャーマニズムの体が現れる」という言葉があるくらいで、都市部や農村を問わずそう名乗る人物は後を絶たない。

私はこれまでこれらウイグル族の宗教世界に生きる人々を取材し、なぜ信じるのか、なぜ治るのか、といった観点からその活動や思想内容について繰り返し検討し、報告してきた。そして一定の成果を上げてきたと自負している。例えば、イシャン派の人々へのインタビューや、彼らが唱えるヘクマツトという詩の分析を通して、その思想や信条が決して特に異質なものではないことを明らかにしてきた¹⁾。あるいはまた、バクシは主として人間関係のもつれに起因する病を対象にしており、その治療は儀式を通して、患者に周囲との繋がりを取り戻させるためのものだ、というような解釈を提示してきた²⁾。

1) 新疆の哈密地区を中心にこのイシャン派の儀式や宗教詩を紹介した拙稿がある（西原，2007）。

2) バクシが行う治療儀式を分析し、その一見派手なパフォーマンスの背後にある治療のメカニズムを明らかにした拙稿がある（西原，1999）。

しかし、実は一つだけどうにも扱いかねる人々がいる。ジョディギヤル (jodigar) という名の「妖術師」である。霊的職能者を話題にしてウイグル族に取材していると、この言葉に出くわすことは決して珍しくない。彼らによると、突然の重病や精神の病は、まずジョディギヤルの仕業であると疑われるのだという。彼らは「ジョダ」(joda) という災いの元のようなものを相手に送りつけることによって目的を達するそうだ。それにしても21世紀の現代において大真面目に「妖術」を訴えられると、その方面に関心の深い私でもやはり違和感は禁じ得ない。しかもウイグル族は、「族」という言葉が日本人につい連想させてしまう「未開」の小部族というわけではないのだから。このようにことジョディギヤルについては、なぜ彼らにはそういうことができるのか、なぜそれを人々は信じているのか、うまく説明することができずに来たのである。

もちろん、妖術を説明する言葉が文化人類学の世界にないわけではない。例えば、アフリカのある部族社会に関する民族誌によく登場する妖術を説明する言葉に、「災因論」がある。通行中どういうわけか白アリの塔が倒れケガをしたとき、その事故は「誰かの妖術のせいだ」と理解される。つまり「妖術」とは、理解しがたい出来事を、それなら仕方ないと納得できるものにするために持ち出される「文化システム」のようなものであるというのだ(長島, 1982: 539)。また、全く違った発想からのアイデアにこういうものもある。不可解な不幸が続けざまに降りかかったとき、その出来事の積み重ねが醸し出す言わば「異常な表情」を、同じく異常な行為である妖術という言葉で喩えているというものである(浜本, 1989: 81)。ある出来事の説明というより、記述する言葉として使われているというのだ。

この二つの説明に共通するのは、妖術そのものは具体的かつ個別的に特定できる行為ではないという前提だ。実際、妖術師は一体誰なのかは誰も知らない、というのが一般的である(浜本, 前掲書: 61)。だからこそ、人類学者は妖術とはあくまで架空の物語だと見なすことになる。言わば私たちがスポーツの試合を見て、その複雑な経過を「流れ」という比喩で表象するように、彼らは不幸の連続を「妖術」という比喩を使って描写しているにすぎない、というこの説明は大変説得力のある議論なのだが、残念ながらジョディギヤルには応用できない。というのは、ジョディギヤルは現実に存在しているからだ。

ジョディギヤルと目され、自らもそうであることを示唆する人にも出会ったし、かつての著名なジョディギヤルとの交遊を語る人にも話を聞いている。ジョディギヤルになりたいと修行に励む者が以前は後を絶たなかったとも言われる。一体誰が妖術師なのか、「誰にも、当人にさえも知りえない」(浜本, 前掲書: 61) というアフリカの民族誌に報告された世界とは大きな違いである。ではそんな非常に具体的にまた生々しく語られるジョディギヤルの人間離れした活躍ぶりを、どういう言葉で説明すればよいのだろうか。別に不幸な出来事についての比喩でもない妖術についてウイグル族はなぜ語る必要があるのだろうか。また、その語りにはどんな意味が込められているのだろうか。本論文で考えたいのはこれらの問いかけである。

1. ジョディギヤルについての語り

数年前のことらしいが、私が調査を行っている哈密地区の公安局に一人のジョディギヤルが逮捕されたという。後に裁判で懲役6ヶ月の判決が下されたとのことだが、驚きである。妖術が法律で裁かれたのだから。全て伝聞なので詳しいことはわからないが、ジョダを送られて病気になった者の家族が実際に警察に訴えたというのが経緯らしい。そのことだけでは逮捕しようがなかつ

たらしいが、その訴えられたジョディギヤルというのが自らこの仕事ぶりを吹聴していたため、逮捕せざるを得ないことになったのだという。

この人が後述するような一定の段階を経た正真正銘のジョディギヤルだったのかどうかはわからない。ただジョディギヤルを名乗る詐欺師は多いという。例えば彼らの得意な項目の一つに恋愛関係の成就というのがある。従ってある異性に自分のことを好きにならせてほしいという依頼が多いのだが、その際無体な対価を要求したりするらしい。こういう詐欺がまかり通ること自体、ジョディギヤルのウイグル族社会への浸透ぶりを物語っている。では、ウイグル族の間でジョディギヤルはどんな姿で理解されているのだろうか。本章では、まずジョディギヤルがそもそもどういふ妖術師なのかを紹介したい。

(1) 活動内容

ウイグル族がジョディギヤルと聞いてまず思い浮かべるイメージは、様々な小道具を用いてジョダを行う（ジョダ クイリシ：joda khlix）人物というものである。彼らは、果物、キャンディ、角砂糖、あるいは水にある文句（アヤット：ayat）を唱える。そしてそれを目当ての人物に与えるのである。例えば、普通のブドウとアヤットを唱えたブドウをそれぞれポケットに忍ばせ、相手の前で普通のブドウを食べてみせる。そして「ああ、これおいしいよ。あなたも食べてみてごらん」とさりげなく工作した方を食べさせるのである。こうしてその人を病気にさせる。他にも、耳垢や爪垢のように汚いものをこっそり食事の中に入れて食べさせる。すると精神病になるという。

あるいは、肉や卵にはこういうことをする。やはりアヤットを唱え、ジョダを送る相手の名前を書いてから、肉の場合は軒先に吊す。卵は墓場で埋める。それらが腐った頃には相手は病気になるというのである。こういう話は非常によく聞く。典型的なイメージと言っていいただろう。またこのバージョンだが、こういう実話も聞いたことがある。鶏の脚を吊り下げ煙でいぶす。そしてアヤットを唱え続けると鶏の脚は縮んでいく。すると目当ての人物の脚や腰もまるで鶏の脚のように肉が削げ、骨と皮ばかりになっていったという。

そして、もう一つジョディギヤルに共通する術として誰もが異口同音に挙げるものが、鉄やくぎ、ねじにアヤットを唱え、ジョダを送る相手の家のドアの敷居のところに埋めておくというものである。彼がここを出入りするたびに何らかの影響を受け、やがて病気になるという。さらに言えば、先述した誰かに自分を好きにならせる、逆に自分を嫌いにならせることも得意とされているが、これもこの敷居に何かを埋めるという方法をとる。

要するにジョディギヤルとは、ある物体に呪文を唱えて特殊なパワーを帯びさせ、それを影響を及ぼしたい相手に直接・間接に接触させることによって望む結果を得る人物なのである。食べられるものは食べさせ、食べられないものは近くの地面に埋めておくことによって。また、鶏の脚のジョダのように、いわば隠喩的な方法をとる場合もある。日本でいう「呪いの藁人形」的なスタイルだ。そして、いずれにも共通するのが、物体に呪文を唱えることである。アヤットという名の呪文を。

ジョディギヤルの妖術行為に必須のこのアヤットとは一体何か。辞書的に言えば、これはクルアーン（コーラン）の一つ一つの文章、文句のことを指す言葉である。しかしウイグル族は、どうもアヤットを特にクルアーンだけに限定せず使用しているようだ。人によっては、ドゥアーという自由に編んでよい神への祈りの言葉すらもアヤットと呼んでいる。かといって、どんな本の

言葉、どんな人の言葉もアヤットというわけではもちろんなく、クルアーンか、それに準ずる本（キタップ：kitab）の文句をそう呼んでいるように思う。ということはつまり、ジョディギヤルのアヤットが掲載されているキタップはクルアーンに準ずるというわけだ。

実は、ジョディギヤルたちは様々な名称のキタップを所持している。そこには、与えたい影響に応じた物体、それに相応しいアヤットが記されており、ジョディギヤルはこのキタップの中身を参考にジョダを行う。どのように相手に病気を得させるか、どのように相手を操るか、すべて掲載されているという。例えば、ラクダというあだ名を持つある高齢のジョディギヤルは、『キャンジル・エサイン（kanjil esayin）』というタイトルのキタップを持つ。これは3、4百年前にアラビア語で書かれたものであるとのことで、この本がその地から伝わってきたことを物語る。それを彼の祖先がチャガタイ語（いわば現代ウイグル語の古語）に訳したのだという。門外不出ということで見せてはもらえなかった。他にも『シャムシル・マアリップ（xamsil maarip）』という同じくアラビア語のキタップもジョディギヤルの世界では有名だそうで、これは既に亡くなった伝説的なジョディギヤル、ラフマンシャー・イマムの下にあったものだという。

ではこれらの本を読めば誰でもジョディギヤルになれるのかということ、もちろんそんなことはありえない。図抜けた素養を持ち、そして厳しい修行を乗り越えた者しかジョダは行えないのである。ではどのようにすればジョディギヤルになれるのだろうか。

(2) 成巫過程

ジョディギヤルになるために必要なキタップがあるという。『イルミー・ヒミヤ（ilmi himiya）』、『イルミー・シミヤ（ilmi simiya）』、『イルミー・キミヤ（ilmi kimiya）』、『イルミー・リミヤ（ilmi rimiya）』というタイトルの、アラビア語で書かれた四冊の本である。因みにイルミーとはウイグル語では知識を意味する言葉である。この内の一冊でもマスターしていれば、前節のようなジョダが行えるという。そしてこの本を師匠の指導の下、どこにも行かず、誰にも会わず、小さな小屋の中に閉じこもってひたすら読むのだという。つまり、師について学ばなければ、ジョディギヤルにはなれないこともわかる。

この修行の間、肉は一切禁じられ、一日一個のパンのみで暮らす。ただし、このあたりの件は人によって若干異なっており、外食のみ禁じられ、奥さんの作ったものしか食べてはいけないとか、自分で殺した肉しか食べてはいけないなどといった語りもある。いずれにせよ、非常に禁欲的に修行に励むことが求められるのは間違いない。

また学習のためのキタップを読む際には、同時にクルアーンのアヤットも何万回も繰り返して読まねばならない。どのアヤットを読むかはその都度師匠が決める。クルアーンとジョディギヤルの学習内容に直接の関係があるわけではないが、イスラム教徒は何かを行うときには必ずクルアーンのアヤットを唱えなければならない。例えば「慈悲深く、慈愛遍き…」という言葉で有名な「開扉の章」を。なのでこれを学習の際にも毎日唱えるのだという。

こうしてジョディギヤルになろうとする者は、想像を絶する努力を経てその技術を学んでいく。その技術の背景には膨大な知識があり、彼らは歴史、文化、物理、化学、植物、動物に精通している。前節で触れたように、目的に応じて使用する物体も代わり、吹き込むアヤットも異なる。このように非常に複雑で多岐にわたる知識と技術をマスターした者がジョディギヤルなのである。ある人は、ジョディギヤルは「念貫（nianguan）」だ、と漢語で表現する。念貫とは、とことん読み抜いている、学び抜いている、というような意味だ。ここまでになるのはもちろん容易なこと

ではないだろう。これまで正真正銘のジョディギャルになれた人は実はわずか7、8人にすぎない、と言う人もいたし、その成功率は千分の一いや万分の一だ、と言う人もいた。

では落後するとどうなるのか。実は「狂ってしまう (feng diao)」のだという。訳のわからないことを始終口走るような人になってしまうそうだ。単に厳しい修行について行けなくてそうになってしまうというだけではない。こういう分岐点があると聞かされたことがある。20日、40日、100日、半年、1年、と段階を追ってひたすら読み学んでいく。そして全てを学び終わったとき、鬼や女性天使、狼やライオンなど恐ろしい動物が目の前に現れてくる。それらを見て、恐れを感じてしまうと、狂人になってしまう。一方全く怖がらず、さらにひたすら読み続ける人だけがジョディギャルになれるのだという。

では一体どういう人がこの道を目指すのか。既にその名が出てきた高名なジョディギャル、ラフマンシャー・イマムなどは若い頃大病を患ったが、それをシャーマン的な人物に治してもらい、その後修行に入ったという。シャーマンの成巫過程とそっくりである。一方このラフマンシャーの息子は7歳からこの修行を始めている。世襲の側面もあるようである。

(3) 由来の物語

もともとジョディギャルは、「ペリシタ (perixita)」であった。ペリシタとは天使のことである。アルツトとマルツトという名の両天使は、無垢な人間に悪の行為を最初に伝えた天使なのだという。そして彼らがジョディギャルの師父になる。しかし神アッラーに捕まり、罰された。あるところに閉じこめられ、ひもで逆さに吊されているのだという。その下にはたくさんの蛇がいて彼らを噛み続けているのである。これがジョディギャルの起源で、ラフマンシャー・イマムが所有していたキタップに書かれているのだそうだ。

またジョディギャルはイスラム教が誕生する前は隆盛を極めていたが、ムハンマドによる教団の創設以降滅亡したという話も聞いた。またムハンマドと直接対決したこともある。ある女性ジョディギャルが、七カ所を結びその結び目にアヤットを念じた紐でムハンマドを縛った。そして彼がどうにも身動きできないとき、見かねたアッラーが「テート・チャラク (tet qarakhul)」（四つの奴隷）というアヤットを送った。すると、すると結び目がほどけ、ムハンマドは助かったのだという。

実はこの物語は、「テート・チャラク」というアヤット集の起源についての言い伝えである。これは普段どういうときに使われるアヤットかという、ひきつけやてんかんなどの病気を治すときに何十万回とひたすら読まれる病気治療のためのアヤットである。それを読むのは文字通り「読む人：漢語では念人 (nianren)、ウイグル語ではオクイディガン・モルラ (okhuyidighn molla)、あるいはアダム・オクイドウ (adam okuyidu) などと呼ばれる」、あるいはごく一般的には「モルラ」などの名で呼ばれる職能者である。彼らの専門は病気の治療だが、その中にジョダによって生じた病気の治療も含まれる。突然の病気や精神の病はジョダが送られた疑いがある、ということ彼ら「読む人」が対応する。例えば患者に冷水をかけ、その水を遠く離れた山の中に捨てる、というようなことを施す。これがジョダを送り返すことになるのだという。あるいは脈拍や顔色を診たりしてジョダによる病気かどうかを判断し、「ラッド・ナーマ (rad nama)」という名のアヤットを読む。これによってジョダの効力を消し去るのだという。

いわばジョディギャルのライバル的な存在がこの「読む人」だが、彼らの存在はムハンマドの言行録である『ハディース』にも以下のように記載され、認知されているのだそうだ。ムハンマ

ドの一人の弟子が旅の途中、サソリに手を噛まれた人を見かけた。毒が体に回りかけたとき、クルアーンを「読む」ことによって彼を治し、お礼に10匹の羊をもらった。帰着後その話をムハンマドにすると、「私もその肉を食べたい」と言って食した。これはアヤットを読むことによる病氣治療をムハンマドが否定しなかったことを意味しており、従ってこのような治療はイスラムでも認められている、と「読む人」たちは理解しているのだという。現に彼らは、病氣治療の際に治療のためのアヤットが書かれたキタップに加え、必ずクルアーンのアヤットも同時に読み続ける。伝説を反復しているのである。

以上が、ジョディギヤルやそれに密接に関わる「読む人」にまつわる由来の物語である。

2. 語りから読み取れること

(1) キャラクターとしてのジョディギヤル

極度に禁欲的な環境下、様々な専門の書を徹底的に読み込み、幻影の恐怖にも打ち勝った者だけがジョディギヤルとなる。彼らは身近にあるあらゆるものをジョダに利用できる。そして人の心も体も自由自在にコントロールすることができる。それがジョディギヤルである。そんな彼らは言わばイスラムの仇敵であり、戦いを挑んだこともあるが神の偉大な力によって抑えつけられてきた。そして、このイスラムとの対立は現在も続いている。「読む人」との競い合いである。クルアーンのアヤットを「読む人」が、ジョダの力を消していく。ということで、この「読む人」もまた、ジョディギヤルについての語りには欠かせない登場人物と言えよう。

さて、このようなジョディギヤルと「読む人」の物語だが、現地で様々な人からこれらの話を聞いているとき、そして、それを記したフィールドノートを読み返しつつこうしてまとめている今もそうなのだが、私の頭に浮かぶ一つの率直な感想がある。この一連の語りはまるで物語のようだ。いや、もっとはっきり言ってしまえば「漫画」のようだ、というものである。ジョディギヤルとは結局、この「漫画」に登場する「キャラクター」なのではないだろうか。もし正義の味方が主人公であるのが定番だとすれば、それは「読む人」で、ジョディギヤルは悪役ということになる。

唐突に飛び出したこの「漫画」という言葉に驚かれるかもしれない。しかし、それは決して的外れな印象ではないはずだ。誰がどう見てもジョディギヤルたちの行為は「漫画」じみてはいないだろうか。漫画の何よりの特徴を挙げるとすれば、それはもちろん「非リアリズム」ということであろう。あり得ない出来事、あり得ない動き。そして語られるジョディギヤルはまさにそういう存在ではなからうか。これは、ジョディギヤルだと公然と指摘されている人から直接聞いた話だが、ジョダの道具は前章で述べた日常の物体だけではない。例えば死人の髪、眉毛、爪や歯、さらには目や鼻など体の一部を用いるという。一体どうやってこんな物を手に入れるのだろうか。

彼はまた葬儀の際死者を覆う白布や、屍体を洗うときに使うたらいも立派な道具になると言う。因みにウイグル族にとって葬式は大変重要な行事だ。宗教的にも社会的にも。前者について言えばこういうことだ。死者はいつか「最後の審判」を受けることになるが、その際人をだましたり殴ったり、そして人のものを盗んだりといった悪行があれば地獄行きとなる。クルアーンに書かれていることで、ムスリムなら誰でも意識するイメージだ。そして、それを救う道がある。ナマーズ (namaz)、つまり礼拝である。これをやれば悪行は消えていくというのだ。そしてそれは他人

がやってあげても良いとされる。従って、葬儀では必ず死者を許すための呼びかけが段取りの中に含まれることになる。できるだけ多くの人に彼のために快くナマーズを行ってもらうために。

また社会的な機能もある。多くの人が集まる葬儀は情報交換や社交の場だというのはよく言われることだ。そもそも彼らは親戚であるとか、友人知人であるといった関係者でなくとも、ほんのわずかな顔見知りでさえあれば、何をおいても参列する、と公言する人々なのである。そんな大事な場を汚すような発言は、まさにウイグル族にとってはあり得ない。だから「非リアル」な言葉なのである。もしそれが許されるとすれば、それこそ事実無根、奇想天外なことが描かれ得る漫画の世界だけであろう。このように、死者を冒瀆する行いを平気で語るジョディギヤルは、漫画の中のキャラクターとしか思えないのである。

さらにこういう話も付け加えよう。若い頃に、一度は修行の道を歩みかけたという方がいる。彼に聞いたところでは、先述のラフマンシャー・イマム以上にすごいジョディギヤルがいる。アビズ・カーリーと名乗るそのジョディギヤルは、とにかくすさまじい能力を発揮したという。ふっと息を吹くだけで人は動けなくなる。大きな門の鎖も一息で外してしまう。また物を瞬間移動させることもできた。友達のポケットの中にナイフや爆竹を移して驚かせたり、うつむけた二つのお椀の間で物を移動させたり。それは手品ではないかと私が聞くと、目の前で二つの帽子を実際に手を使わずに移動させ重ね合わせたところをその目で見たとという。また透視もできた。友人が今何をしているか、どこにいるかびたりと当てることができたという。もし本当に手品ではないとすれば、それはやはり漫画としか言いようがないのではないだろうか。

因みにジョディギヤルに「非リアル」な雰囲気をもとわせることに一役買っているように思われるものがもう一つある。彼らの名前である。先ほどのアビズ・カーリーの父はアビズ・アジという「読む人」で高名な詩人でもあったそうだ。そして、あのラフマンシャー・イマムが大病を患ったとき治療した人物である。そんな彼ら伝説的ジョディギヤルたちの名前の一部、イマムやカーリー、アジは、イスラム教の宗教的職能者の名称でもあるのだ。イマムは地方の小さいモスクの礼拝指導者のことだし、カーリーはクルアーンを暗唱し、モスクでの礼拝や日常の儀礼を執り行える人物のことを指す。アジはウイグル語ではメッカ巡礼を果たした人に送られる尊称である。つまり、それらは固有の名前とは言い難い。彼らが元々与えられ、一人のウイグル族として日常生活を送る上で使い続け、呼ばれ続けてきたはずの「生きられた」名前ではないのである。この「生きられた」名前を持たない彼らは、言い換えれば語りの中で「生身の体」を持っていないということになるのかもしれない。れっきとして現実に存在した人たちがばかりなのに（うち一人には私自身直接会っている）。

こうして語りの中のジョディギヤルが、ますます「漫画」の「キャラクター」に見えてくる。実は、「ジョディギヤルは西遊記に出てくる妖怪みたいなものだ」という発言を私は聞いたことがある。彼ら自身の口から、これは物語の「キャラクター」だとあらかじめ宣言されているのである。

(2) 語りの構造分析

では、以上の私の発想を理論的に根拠づけてみよう。プロップやグレマスなどに代表される物語の構造論などを漫画分析に応用している文芸評論家の大塚英志は、「僕は…(略)…漫画表現が、…(略)…身体性を意図的に欠いた非リアリズム的な作画法によって生身をもった人間を表現する矛盾を抱え込んでいることを指摘し続けてきました」と語る（大塚、2008：108、省略は筆者）。

彼なりの漫画の定義である。これは本稿の考察の根幹にも関わる非常に重要な指摘なのだが、その検討は次章で行うとして、まずはこの引用の前半部分に注目しよう。そこが、本節の目的であるジョディギャルが「漫画」的であると述べることの証明に役立つはずだ。「身体性を欠いた非リアリズム」とは要するに記号的な表現ということだ。漫画の作画は、顔や体をいちいち模写的に写生するのではなく、この動きのときはこれ、この感情のときはこれという定められた記号リストの中から選んできたパーツを組み合わせて機械的に仕上げるのだという（大塚、2003、前掲書）。

どんなに伸びようが曲がろうが、大きくなろうが小さくなろうが、飛び上がろうが落ちようが、自然の法則を無視して漫画は描かれる。そういう暗黙の共有された「記号リスト」があるのだから。自然の法則にこだわらない以上、登場人物は「生身の体」は持てない。それは自然を超えられない物だから。とすれば、あり得ないことを成し遂げることができ、「生きられた」名前を与えられていないジョディギャルは、やはり「生身の体」を持たない「漫画」のキャラクターとしか言いようがないのである。そして、彼を話題とする語りは、もちろん「漫画」的な物語ということになる。

「漫画」ということになれば、そこにはもしかしたら一定の構造が見出せるかもしれない。上に引用した大塚は、民話や昔話などが持つプロットを登場人物による決まった行為群の組み合わせとするプロップらの物語論がそのまま漫画にも適用しうることを示してきた（大塚、2000、2008）。例えば物語の登場人物の行為は「不在」、「禁止」、「違反」、「偵察」、「移動」等々といった言葉にまで抽象化できる（大塚、2008：152）。その水準ではあらゆる物語はほぼ同じ姿を見せることになる。それが物語の構造、形態である。逆に言えば、これらの言葉を具体的なレベルにまで下ろしていくことが、物語を書く営みということになる。それは漫画も変わらないだろう。そして、こんな物語の構造の一要素として「敵対者」による「邪魔」（大塚、2000：40）というものがある。これはグレマスの言う「行為項モデル」の一つだ。

ジョディギャルの語りについて言えば、この「敵対者」が「読む人」であることは明白だろう。ジョダの効果を消し去るのだから。しかも、彼らが正反対の属性を持つことが、彼らに関する語りの中では極めて強調されてもいるのである。「読む人」は治療を行う前に必ずタラット（tarat）を行う。タラットとは水で体をきれいに洗うことである。これはもちろんナマーズの前に信者が必ず行わなければならない義務でもある。ジョディギャルは、何とこのとき自分の尿で洗うという。汚い物で洗って自分を汚くするのである。「読む人」とまさに正反対のことを彼らは行うのだ。また、彼らがクルアーンを読むときは後ろから読むのだという。これも正反対である。このように、ジョディギャルと「読む人」は、語りの中で全く対照的な存在なのである。こういう要素が存在することも、ジョディギャルの語りが物語ひいては漫画と同じ性質を持つものであることの傍証となろう。

また、大変奇妙なことなのだが実はジョディギャルと「読む人」が特別な関連を持っていることにも注目したい。何と両者は表裏一体と言っても良いのである。「読む人」が同時にジョディギャルでもあると常に噂されてきたのだから。例のラフマンシャー・イマムもアビズ・カーリーも普段は「読む人」として活動していたそうだ。また私はそのラフマンシャーの息子を含む4人の「読む人」に直接インタビューしたが、そのうち一人は周囲からジョディギャルだとはっきり名指されていた。本人もその事実を決して否定しようとはしなかった。先述のジョディギャルのキタップの所有者でもある。しかし彼は普段「読む人」として活動していると述べる。20歳から治

療活動を始め、これまで50人を超える重病患者を治したと自慢そうに語ってくれたのである。彼はジョディギヤルのキタップだけでなく、病氣治療のためのキタップも2冊所有しており、それを学んでいるという。そして治療に際しては、既に述べたようにコーランのアヤットを含む7つのアヤットを必ず唱える。このようにジョダも「読む人」もその技術の基礎がキタップという点で、また両者ともアヤットを重視するという点で、実はそっくりなのである。それは同一存在の光と影と言ってもいいかもしれない。

実際、ジョディギヤルについてある一般のウイグル族と話しているとき、彼は確かにこう言った、「ある人とある人の間に衝突が生じたとき、相手をやっつけるだけの自信や能力がない方が『読む人』ののころに行ってジョダを送ってもらう」と。「読む人」とジョディギヤルが明らかに混同されている。ここでおもしろい経験を話したい。哈密の「非物質文化研究所」研究員で、ウイグル族の歴史や民俗文化に精通しているサマツ・アスラ氏に「読む人」について伺っているとき、「読む人」が干し果物やナンのかけら、鉄などを用いて病氣を治す具体的な方法についての話にさしかかった。「読む人」はこれらの物にアヤットを吹き込み、そしてそれを患者に食べさせて治すという。どこかで聞いた話である。そう、これはジョディギヤルのやり方ではないか。で、それを確認すると、彼は平気で「その通り」と答える。「読む人」についての話が、いつの間にかジョディギヤルの話へとすり替わっていたのである。そして、自分の混同に気がついた後、その場にいた他のウイグル族らと慌てて確認したあげく、要するにという感じでこう語った。「良いことをする『読む人』もいれば悪いことをする『読む人』もある。後者のことをジョディギヤルと呼んでいるが、どちらも『読む人』である。なぜならどちらも『読むこと (okhux)』で事を起こすから」。

こうしてジョディギヤルと「読む人」がウイグル族のイメージの中では一体の存在の二つの側面であることを強調したのは、ジョディギヤルについての語りが「漫画」的であることをさらに検証したかったからである。何度も引用している大塚によれば、主人公の「影」が登場し、その「影」と戦い、最後には和解に至るというパターンは、物語にしばしば見られるものであるという（大塚、前掲書：226-251）。ここでの「影」を彼は臨床心理学者の河合隼雄を援用して、「個人の自我が否定し、受け容れ難いとする傾向のすべて」という意味で用いている（大塚、前掲書：235）。ジョディギヤルと「読む人」の関係はちょうどこのパターンに相当しないだろうか。やはり彼らのありようは非常に物語的、つまり漫画の中で登場しがちな型を踏襲しているのである。

さらに付け加えておけば、前章で紹介したジョディギヤルの成巫過程もまた漫画や物語のおなじみのパターンなのである。師匠の指導下、隔離された場所で厳しい修行を行い、果ては鬼や動物と戦って打ち勝ち、とうとうジョディギヤルになるという成り行きが定番のストーリーであることは、大塚の「物語とは何らかの通過儀礼的な枠組の反映」（前掲書：233）という言葉を待つまでもなく気づくことである。以上のようなジョディギヤルをめぐる語りの分析から、それはいわゆる「物語の構造」を共有しており、さらにその「非リアル」な突飛さを加味すると、もはや「漫画」としか言えないと結論づけられるのである。では一体なぜウイグル族は、ジョディギヤルを主人公とした「漫画」を紡がなければならないのだろうか。その理由や背景を考察してみるのが次章の目的である。

3. 「漫画」を語らせるもの

ジョディギャルについての語りが「漫画」チックなものになっている背景を探る上で参考になるのが、やはり大塚英志の漫画論である。2章第2節の冒頭で既に紹介したが、ここでそれをあらためて取り上げたい。実はその引用はいくつかの部分を省略している。最初の省略部分にあったのは手塚という名前だ。あれは実は手塚治虫の漫画を特徴づけた言葉だったのである。大塚は同じ意見をあちこちで書いているので、ここで再度似た主旨の言葉を引用してみるが、要するに手塚治虫は、「『記号的』な表現手段を採用しながら、その技術によって、にもかかわらず記号的でない生身の人間存在や社会的現実を描こうとしてきた」のである（大塚、2003：126）。漫画という本来非リアルな表現手段で、リアルな生身の現実を描こうとしたわけだ³⁾。

彼はなぜそうやって「生身の人間や社会の現実」を描くことにこだわったのだろうか。大塚はその原点を手塚の戦争体験に見る。「『死』を国家から求められた戦時下の少年としての経験」から来ているというのだ（大塚、2008：122）。「個人の固有性や尊厳が損なわれ続け」た戦中の日本社会で、手塚は自分だけの生身の体が持つかけがえのなさを、いやが上にも意識させられたのである（大塚、前掲書：122）。つまり、手塚が漫画を描いた背景には、自由に、自分らしく生きていけれどもそれが許されない社会のあり方があった。戦時下の現実において自らが味わってきた矛盾と生きづらさを、自らの漫画を通して訴えようとしたのかもしれない。従って、手塚が描く漫画の登場人物たちは皆、何らかの「矛盾と生きづらさ」を抱えていた。

有名な鉄腕アトムは人間の心を持つがボディは機械であり、永遠に成長できない。また女の体に男の心が宿った騎士、人間の心を持つウサギ、奪われた体のパーツを取り戻さねばならない人物、人工外皮に覆われた子ども等々、手塚漫画には、あたかも手塚と社会の関係を「分離した内と外」（大塚、前掲書：127）に変換して造形したとしか思えないキャラクターが頻出する。彼らは皆、「矛盾」を抱え、従って「生きづらさ」をかこつ。いわば手塚の分身だったのかもしれない。

ここまで述べてきて、実は一つの仮説が立てられることに私は気づいている。手塚が漫画を書いたのは、自分のかけがえのなさを踏みにじる社会の現実を訴えるためであった。とすれば、同じ「漫画」であると思えないジョディギャルの語りもまた、同じような背景の下で生み出されたと言えるのではないだろうか。検討してみよう。

私はジョディギャルについて多くの人から話しを聞いたが、詳細に、生き生きと語ってくれた人は限られている。同業の研究者や専門家を除けば「読む人」やジョディギャル本人、そして私のウイグル族研究でキーインフォーマントとなってきている老人らである。彼らは一体どういう人物なのか。実はそのほとんどに共通するある属性がある。彼らは皆イシャン派と呼ばれるムスリムなのだ。「はじめに」でも触れたウイグル族独自の流派である。通常「ソピ・イシャン（あるいは単にソピ）」と呼ばれる彼らは、一般のムスリムの人々から奇異の目で見られ、差別的に扱われることが多い少数派である。

実際、モスクのイマームなどに取材すると、必ずと言っていいほどソピに対する厳しい批判の声を聞くことになる（西原、2007）。その批判の根拠が判で押したように同じなのだが、「彼らの

3) それにしても、手塚はそんな思いを表現する媒体としてなぜ漫画を選んだのか。大塚も、それは「今のところわかりません」と述べる（2001：30）。ただ想像はできる。記号で表現するため一瞬一瞬のリアルで多彩な現実を写生するのに向かない漫画は、それゆえにこそ、一人一人の固有性を持ちたいのに対して人物を描くの非常に相応しいメディアだったからではないだろうか。

信仰はやり過ぎ。あれでは生活が成り立たない」というものである。さらに、「宗教活動にのめり込むので仕事もしない。結果、不正な手段で収入を得ようとすることになる」という文字通り悪人のイメージも一般的にはある。そして、彼らはソビの信仰活動をムスリムの行為の第5等級目のナプラ (napla) に位置づけている⁴⁾。因みに一つ置いた7等級目の行為は「軽犯罪」である。

私が見たところ、これはソビ・イシャンにとって酷な評価だ。そもそもイスラムという言葉自体「神への絶対帰依」(小杉, 2002: 128)なのだから、懸命に祈ることがなぜ否定されねばならないのか、とってしまう。ソビも同じ思いだろう。しかも現実の彼らはむしろ勤勉だ。私が取材したソビは例外なく皆普通の農民だったし、「はじめに」でも触れた、彼らの主要な活動であるズィキラも週一度、わずか数十分のことだ。彼らがそこで歌う詩、ヘクマツトも仕事帰りの馬車の上で、あるいは夜くつろぎながら自室でひっそりと朗読されているにすぎない。また自らもこれらの行為を上述のナプラと呼び、「別にやらなくてもいいこと」と自虐的に語る。こんなに控えめにして、へりくだってもやはり理解してもらえていない。つまり、ソビにとってウイグル族社会は「生きづらい」のである。その「固有性」を認知されず、「尊厳」も奪われているのだから。これが、私にジョディギヤルについて語ってくれた人々の立場である。

最早言うまでもないだろう。彼らは戦中に生きた手塚と同じ思いを抱えていた。そして同じように「漫画」を描いた。とすれば、その理由もまた手塚と同様なことではなかったか。恐らく「自らの抱える矛盾と生きづらさ」を訴えるためだったのである。

とすれば、そんな「漫画」に登場するキャラクターもまた手塚のそれと重なり合うはずだ。ではジョディギヤルのどこに「解離した内と外」が見受けられるのだろうか。ここで、漫画のもう一つのキャラクターである「読む人」のことを思い出したい。まずは彼らを考察の俎上に載せよう。私は彼らのパルズ (pariz: 義務) や倫理観を詳しく聞いているが、非常に興味深いものであった。すでに述べたようにクルアーンを「読む」ことによってジョダを消すとされる彼らは、実際にイスラミ的な価値観を意識し、それへの配慮が著しいのである。

例えば、ある「読む人」は絶対やってはいけないことの筆頭に「占い」を挙げた。ウイグル族社会でこれを行うのは「はじめに」で触れたバクシつまりシャーマンだが、これはイスラミ的価値観の中では否定されるべきものである(井筒, 1983: 433)。そういうものを自らも何より否定する。さらに、「自分の力はアラーを超えるなどと言ってはいけない」、「イスラム教を売ってはいけない」等とイスラムを意識した条項が続く⁵⁾。逆にやらなければならないこととして彼が挙げてくれたことの中に、「大事な仕事の前、旅立つ前に厄払いをしてあげる」、「病気になったり災難に遭った時には行って助けてあげる」、「貧しくて葬式が出せない人のために手助けする」といったことがあった。これらは実はイマーム(モスクの礼拝主宰者)が行う仕事だ⁶⁾。そして最

4) あるソビ・イシャンによればムスリムの行為には全部で八つの等級がある。上からパルズ、ワジバ、スンナット、ムスタハッブと続く。例えばパルズは神への義務であり、スンナットはムハンマドへの義務である。ムスタハッブは通常の道徳である。ソビの信仰は一般道徳ほどの価値すらない、と見なしている。

5) さらに、「人捜しは引き受けない」という項目も9番目に挙げてくれたのだが、実は写真を見て「人捜し」を行うというのはバクシが行う仕事の一つである。まるで念押しするように自らをシャーマンとは差異化しようとしていることがわかる。

6) 特に前2者については、そのためにナザル (nazir) という儀礼をウイグル族は頻繁に行う。早朝に家族・友人・親族を集め、イマームを招いてクルアーンのアヤットを読んでもらうのである。これから行う仕事を神や祖先に報告して加護を願う。また幸運・不幸に関わらず、何かにつけこれを実施し、祖先と神

後に、この「読む人」はこれらのパルズは「イスラムの規定に従って行っている」と言っているのだからである。

このようなイスラムの優等生的な発言は「読む人」にとって珍しいものではない。「治療は全て神の名義の下で行う」ことをパルズとし、クルアーンの最初のアヤットを唱えた後治療を開始する「読む人」もいた。しかしこれは彼だけでなく、全ての「読む人」がクルアーンのアヤットを治療中に唱える、と語る。それは治療に欠かせない技術なのである。そして治療の前には必ずタラット（沐浴）をする。こうした「読む人」のイスラムへの傾倒やクルアーンの重視が、彼らの治療もまたイスラムの宗教活動の一環であるというイメージを人々に与えるため、それを受け入れてしまう人が多い、という意見を聞いたこともある。これらの語りだけから見れば、彼らの行為は確かにイスラム的と言っていい。しかし、私はそれとは明らかに矛盾する内容の話もまた同時に耳にしていたのである。

「神を超えない」、「神の名の下に」と言いながら、彼らの内のある者は「不幸な人たちのために運命を開いてあげられる」と語る。「人間の宿命（天命）に関しては、全て神が決定なさる」（小室、2002：251）という予定説がイスラムの基本ではなかっただろうか。またクルアーンは確かに唱えるが、同時に治療用のキタップを各自が所有しており、治療ではその中のアヤットも必ず読む⁷⁾。そして、その治療儀式では派手なパフォーマンスが繰り返されるらしい。熱したスコップを裸足で踏み、そのままの足で患者を踏みつける。患者を毛布でぐるぐる巻きにして机の上に置き、その下に置いたバケツの水に熱した鉄棒を突っ込む。その蒸気で汗をかかせるのである。また、焼けた鉄を舌に押し当てるというものもある。イスラム色に加え、彼ら独自の治療もしっかりなされているのである。

要するにこういうことだ。ジョディギヤルの「漫画」に欠かせないキャラクター、「読む人」はイスラムの衣をまといつつも、その中に固有な思考と技術を秘めている。真摯なイスラムでありながらも、同時にそこから離れ、時にはそれを超えようという思いさえ垣間見させる彼らは、明らかに「解離した内と外」を持つのである。そして、その固有性はしかし、イスラム教のウイグル族社会では無制限に発揮できるものではない。で、補償として過剰にイスラムに接近することにもなる。実際彼ら「読む人」の多くはソビであり、またイシャン派だけが「読む人」を承認しているという。固有の能力を見せたいが、しかしそうすると熱心なイスラムであることも欠かせず、そのために偏見を喚起してしまうことになる。実際、本人の口から、あるいは彼らをよく知る人々から語られるその治療成果の目覚ましさにもかかわらず、彼らは一般的には良いイメージを得ていない。それどころか詐欺師まがいの評価さえ受けているのである⁸⁾。やはり「生きづらさ」を抱えている。「矛盾と生きづらさ」、まさに手塚のキャラクターそのままに造形されているのが、この「読む人」なのだ。

- ↘ に報告する。それらとの絆を確認・強化する場ではないかと思われる。また、葬式においては、屍体を洗う人やそれに布を巻く人をイマームが選任し、また配布する布やお菓子などの分量も彼が決めるなど、差配役を担う。
- 7) 例えば彼らに共通する治療法、ダム・サルドルシ (dam saldurux) は、まずクルアーンのアヤットを読んだ後、紙切れにキタップのアヤットを書き入れ、布で包んでひもで患者の首に吊す。またキタップとして、クルアーンやハディースから引用したアヤット集を用いる「読む人」にも出会った。
- 8) そのせいか、彼らのパルズには自分で稼ぐことによって生活するよう戒める条項が多い。また、農作業の時間給に換算して治療費を請求する、という「読む人」もいた。適正な報酬しか得ていない、ということを訴えるためであろう。それは逆に、彼らが世間からどう見られているかも物語っている。

ではジョディギヤルは一体何なのか。2章の最後の部分を想起してみる。ジョディギヤルは「読む人」のいわば「敵」であり「影」でもあった。それが「漫画」などの物語にはありがちな設定だということも既に述べている。とすれば、手塚と同じ境遇にある人たちが、手塚と同じ「漫画」というスタイルで、手塚と同じような属性のキャラクターである「読む人」を描いたとき、そこに「影」のキャラクターがあっても不思議ではない。でも何のために。最後にもう一度本研究で私が大きな影響を受けた大塚の言葉を借りたい。「主人公が歩むのとは違う自己表現を目指し、主人公と何らかの形で統合され、主人公の『私』や『私』の拠り所を独善的なものにならないようにするためにも、役割を果たすように設計された」ものこそが主人公の「敵」、「影」ではないか、と彼は述べている（大塚，2008：251）。そう、ジョディギヤルは「読む人」を「独善的なもの」にしないために造形されたのではなかっただろうか。ソピ・イシャンたちが自らの苦境を訴えるために作り出した「読む人」が、その固有性ゆえにイスラムの敵として暴走することのないよう、婉曲に否定しておいたのである。

終 わ り に

以上、これまで私の理解をどうやっても拒んできたジョディギヤルを、「漫画」という言葉を借りて説明しようと試みてきた。ウイグル族なら誰でもよく知っているジョディギヤルだが、その姿を生き生きと描ける人は限られている。研究者や作家を除けば、ジョディギヤルを含む当事者や歴史をよく知る老人、そしてソピ・イシャンたちである。本稿は彼らが語ってくれた内容を「漫画」という比喩で捉え直し、それを理論的に検証しようとしたのである。

現在のところ、私にはウイグル族の「霊的職能者」が、語り手たちの鬱屈を具現化したキャラクターとして立ち現れてきたとしか思えない。長年の疑問に一つの答えが出せたという意味で書き終わった今多少すっきりした気にはなっている。しかし、実はそれがぬか喜びに終わる予感もぬぐえていない。ウイグル族は多い。彼らが住む新疆ウイグル自治区どころか、私が主なフィールドとしている新疆東部の哈密地区でさえあまりに広大である。ここのウイグル族はウイグル族全体の中ではほんの少数派に過ぎないというのに。そして、その中でさえ文化の多様性がある。つまり、これからまた一体どんな語りに出会うかわからないのだ。そのときは、再度一から考え直していこうと思う。今の所、ウイグル族の宗教世界から帰還することを望む気には全くなれないのである。

参 考 文 献

- 井筒俊彦, 1983, 『コーランを読む』, 岩波書店.
大塚英志, 2000, 『物語の体操』, 朝日新聞社.
大塚英志, ササキバラ・ゴウ, 2001, 『教養としての〈まんが・アニメ〉』, 講談社.
大塚英志, 2003, 『キャラクター小説の作り方』, 講談社.
大塚英志, 2008, 『キャラクターメーカー』, アスキー・メディアワークス.
小杉 泰, 2002, 「イスラーム」, 『イスラーム辞典』, 128-131頁, 岩波書店.
小室直樹, 2002, 『日本人のためのイスラム原論』, 集英社.
長島信弘, 1982, 「解説」, エヴァンズ=ブリチャード著, 向井元子訳, 『ヌアー族の宗教』, 533-542, 岩波書店.
西原明史, 1999, 「病気と治療 中国とカザフスタン」, 片山隆裕編, 『アジアの文化人類学』, 73-86頁,

ナカニシヤ出版会.

西原明史, 2007, 「ウイグル族のもう一つのクルアーン 宗教詩『ヘクマット』の翻訳と解説」, 安田女子大学紀要第35号, 123-133頁.

浜本 満, 1989, 「不幸の出来事 不幸の語りにおける『原因』と『非・原因』」, 吉田禎吾編, 『異文化の解説』, 55-92頁, 平河出版社.

[2008. 9. 29 受理]